

藩あげての害獣との戦い!?

栃木県立博物館 学芸員 飯塚 真史

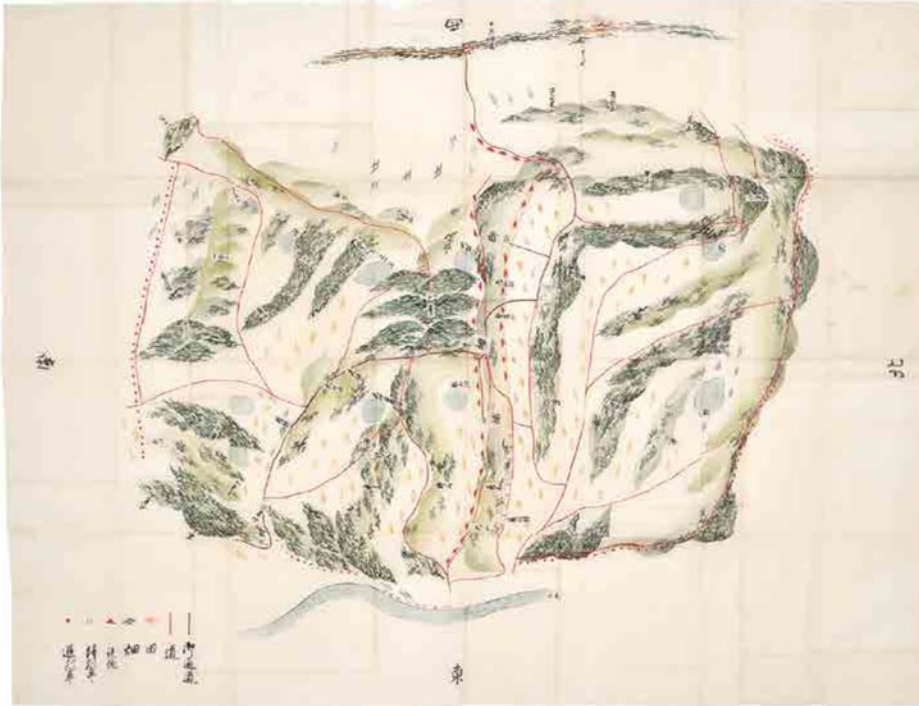
近年、市街への猪の出没が話題になつてはいるが、江戸時代には猪・鹿による農作物被害はより深刻なものがあつた。それは宇都宮も例外ではない。

寛政四(1792)年に宇都宮藩による長岡山付近での猪鹿追(猪・鹿の狩り)の配置を描いた絵図「長岡山猪鹿追大絵図」と計画の詳細を記載した文書「於長岡山猪鹿追一件」(ともに個人蔵)から宇都宮における猪鹿追の詳細がうかがえる。絵図によると、北は瓦塚、東は長岡村・山本村、南は稲荷塚・向井、西は赤坂に及ぶ広大な領域で狩りが行われたことがわかる。また、勢子が南北にいて、鉄砲が中央に配置されていることから、南北から追い立て、中央(現在の宇都宮環状道路付近)におびき寄せる作戦であつたと推測される。一方、文書からは、宇都宮藩主戸田忠寛をはじめ、家老本多四郎左衛門・戸田彦右衛門以下、家臣約300人、村民約500人、総勢800人以上が動員されていることがわかる。藩を挙げての事業であつたといえる。

動員された村民の種別に「勢子五百人」に加えて「村方鉄砲者、拾九人」と書かれている。江戸時代には参勤交代など大名の移動の際の鉄砲・火縄銃にも手形(銃の特徴・数量)が発行されるくらい厳重に管理

されていた。その一方で、武器として用いる武家と異なり、猟具として用いる村方には制限はあつたが、一定の規則により許可していた面がある。「村方鉄砲」は、鉄砲所持の許可を受けていた者と考えられる。そうしたことから、この19人の鉄砲所持者は普段から害獣駆除にあたっていた

と推測される。また、800人を超える人数で狩りをおこなっている事実から相当数の猪・鹿が当地域に生息していることを藩が把握していたことがうかがわれる。このように宇都宮藩・領民は定期的に一体となつて害獣駆除にあたっていたと考えられる。



「長岡山猪鹿追大絵図」(個人蔵)